

絵地図から近世の世界観を探る
—オンライン事前学習と来館型学習の併用による博学連携研究—

逗子開成中学校・高等学校 林 晃之介

1. 実施学年及び教科・領域

学年：中学校・高等学校 選択希望制授業

領域：社会科・歴史的分野／地理歴史科・日本史探究

2. 学習のねらいと博物館の活用との関連について

(1) 単元名：絵地図から近世の世界観を探る

(2) ねらい

①学習指導要領との関連

- a. 『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）—社会・歴史的分野—』（以下、「中学校学習 指導要領」）2. 内容「(3)近世の日本」「(7)世界の動きと統一事業」において「ヨーロッパ人の来航の背景とその影響、織田・豊臣による統一事業とその当時の対外関係、武将や豪商などの生活文化の展開などを基に、近世社会の基礎がつけられたことを理解する。」とある。また、「(5)幕府の政治の展開」において「社会の変動や欧米諸国の接近、幕府の政治改革、新しい学問・思想の動きなど基に、幕府の政治が次第に行き詰まりをみせたことを理解すること。」とあり、そして課題の追究を通して、「近世日本を大観して、時代の特色を多面的・多角的に考察し、表現する」力の育成を目指している。
- b. 『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）—地理歴史・日本史探究—』（以下、「高校学習指導要領」）2. 内容「C近世の日本と世界」において、「(1)イ、(7)、村落や都市の支配の変化、アジア各地やヨーロッパ諸国と交流の影響等に注目して、中世から近世の国家・社会の変容を多面的・多角的に考察し、時代を通観する問いを表現すること。」これを前提に、「(2)イ、(7)、歴史資料の特性を踏まえ、資料を通して読み取れる情報から、近世の特色について多面的・多角的に考察し、仮説を表現すること」、そして、課題を追究したり解決する活動を通して、「(3)ア、(4)、…学問・思想の展開、庶民の生活と文化などを基に、幕藩体制の変容、近世庶民の生活と文化の特色、近代化の基盤の形成を理解すること。」とある。具体的な内容の取り扱い方について、「3. (1),ウには「年表や地図、その他資料を積極的に活用し、地域の文化遺産、博物館や公文書館、その他の資料館等を調査・見学したりする等、具体的に学ぶよう指導を工夫すること」とあり、また同(2),ウには「…デジタル化された資料…などを積極的に活用し、具体的に学習できるよう工夫するとともに、歴史資料や遺構の保存・保全等の努力が図られていることに気付くようにすること。」とある。（下線筆者加筆）

本実践では国立歴史民俗博物館（以下「歴博」）第三展示室の絵地図資料の読解や比較を通して、日本人が伝統的に有していた世界観（＝仏教的世界観・三国世界観）を理解し、近世を通して得られた諸外国の情報が仏教的世界図の中に注入され、改変されていく様子を読み取り、世界観の変容を考察する実践を行い、「近世日本を大観して、時代の特色を多面的・多角的に考察し、表現する」力の育成を考えていきたい。

②単元の目標

- (ア) 絵地図（史資料）や各種展示資料から自分なりに興味関心のあることを読みとき、主体的に調べることができる。
- (イ) 絵地図を観察し、伝統的に有していた世界観とその背景（仏教的三国世界観）について理解することができる。
- (ウ) 複数の絵地図を比較して、近世を通して得られた諸外国の情報が仏教的世界図の中に注入される様子を観察する事ができる。
- (エ) ワークシートの作成を通じて、近世日本の時代の特色を多面的・多角的に考察し、自分自身の言葉で表現することができる。

(3) 博物館との関連

①活用方法：来館型活用（事前学習では、歴博資料をオンラインで利用した）

②活用資料


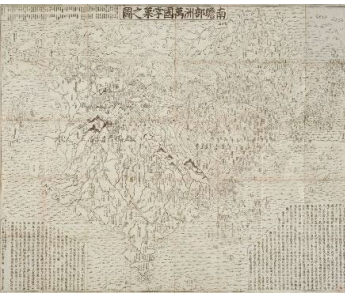
・第3展示室…「国際社会の中の近世日本」「絵図・地図にみる近世」

「南瞻部洲図」「南瞻部洲萬國掌菓之図」「須弥山儀図」「改正地球万国全図」「地球図」

*今回は事前学習で使用するため【歴博画像データベース】で公開されている以下の資料の高精細画像データを歴博より提供していただき活用した。

*事前学習での活用方法としては、参加生徒に対し、Google Classroom を利用し、高精細画像データと事前課題を配信・共有した。地図資料の細部まで読み込むことができるようにしたうえで、課題に取り組みさせた。

本実践で主に使用した歴博所蔵資料

<p>【事前課題で使用】 「南瞻部洲図」 資料番号：H-1529-5 年代：江戸時代中期</p> 	<p>【資料解説】 法隆寺に所蔵される現存最古の仏教系世界図（1364年）の系統に属する写本。手描手彩。江戸時代中期。右上の島が日本島で、大陸とのあいだに閉じられた海域は形成されていない。近世以前の仏教系世界図の形態を示す点においても、またこのような古体の図が近世に写されたことの地理思想史的意義を考察するうえでも貴重な資料である。 出典：歴博 館蔵資料画像データベース (https://www.rekihaku.ac.jp/up/cgi/getdocrd.pl?tn=1&ti=254316&h=/history/w11672877424_29236&ch=2&p=param/syuz2/db_param&o=1&k=20&l=&sf=0&so=)</p>
<p>【当日課題で使用】 「南瞻部洲萬國掌菓之図」 資料番号：H-110-2-92 年代：1710（宝永7）年</p> 	<p>【資料解説】 日本で最初に刊行された仏教系の世界図である。その直前に、西洋の地理知識を部分的に取り入れる形で久修園院（枚方市）の住職宗覚が手書きで作成したうちわ型南瞻部洲図を一部改訂している。作者の浪華子は、華嚴寺の開祖となった学僧鳳潭（ほうたん）（1654～1728）である。彼によって開かれた華嚴寺は、京都の西郊に現存し、鈴虫寺という通称で知られる（京都市西京区）。古代インドの仏典『俱舍論』等で説かれた世界は、太陽や月が頂上付近を回っているとされる須弥山=メール山を中心に、水平・垂直方向に広がる立体構造になっており、人間が居住しているのは、水平方向に同心円状に広がる7番目と8番目の山脈の間にある大海の南側に浮かぶ大陸、すなわち「南瞻部洲」であるという。この大陸は大部分が天竺（インド）とされ、北に広く、南に狭いという形状は現実のインド半島に似ている。とはいえ、元来これらは、地理的な正確さを追求したというよりも、教義を図解したものである。天竺図で現存最古の図は、法隆寺に伝わる貞治3年（1364）の「五天竺図」である。これに対して本図は、五天竺図に西洋式世界図の情報を部分的に取り入れたもので、図の左上のヨーロッパは小さく島状に広がり、アフリカ大陸はその南方にある。一方、目を右に転ずると、アメリカ（「亜黒利加」）は日本の南に位置する島として描かれている。図の中央に渦を巻く形で配された「阿耨達（あくたつ）池」は、ガンジス川・インダス川・オクサス川（アムダリア川）・タリム川の四大河の源流として、河流を四方に延ばすように描かれている。その南方がインドである。その右上に中国が配され、その東方に浮かぶ日本列島は、山城州など各国に分かれ、中世由来の行基図における倭形の集合体からは逸脱して、実情に少しは合わせた形と見なされる。とはいえ、広さは、インドや中国に負けないほどに誇張して描かれている。出版元は、本図のような「文台軒宇平 蔵版」の他、京の永田調兵衛蔵板も認められ、再版も含めるとかなりの数が出回ったのであろう。本図は墨一色であるが、手彩色が施されたものも認められる。 解説文出典：国土地理院 HP 古地図コレクション (https://kochizu.gsi.go.jp/items/165)</p>

(4) 指導観

中学社会歴史的分野や高等学校日本史探究での歴史学習では、前近代の各時代の対外関係や文化について学習するが、当時の人々の“世界観”について深く学習をする機会は極めて少ない。当時の人々の世界観を探ることはその時代の理解を深める上では重要な活動であるといえよう。また、前近代の中でも近世・江戸時代は①仏教思想に基づく伝統的な三国世界観（日本・中国・天竺 [インド] によって世界が構成されているという認識）と、②南蛮人の渡来以降もたらされた西洋的世界観（ヨーロッパから直接もたらされたものと、中国経由で漢訳され間接的に伝わったものに分けられる）とが接触する時期であり、西洋からの知識が漸続的に流入し、様々な系統の世界図が作成された¹。その中であって、中世以来の伝統的な世界観は、圧倒的な支持を受けたわけではないが、新たな世界観が入ってきてもおお変化しながらも連続と受け継がれていったことに注目させたい。本実践では教室での授業ではあまり扱われない近世の世界図を読み解くことで、当時の世界に関する知識の広がりについての理解や「近世日本を大観して、時代の特色を多面的・多角的に考察し、表現する」力の育成を目指した授業づくりをおこなう。

実施方法について、今回の授業実践を行う前年度に来館型学習を行い、歴博展示を見学して博物館や作品の見方がどう変わったのかを調査した。その際、中1生徒の感想で「今まではあまり小さい文字を気にしていなかったけど、今回の土曜講座で小さいところまでみると、新たな発見が見つかるんだなと思いました。」というものがあつた。そこで、本実践では絵地図の読みとりを行う際に、生徒が資料の細部まで読み取ることができるように、以下のように構成を工夫した。

- ・事前学習では、ICT機器を活用してデジタル化された絵地図資料を利用することで、より細部まで読み取ること、かつ学習者それぞれのペースに合わせた学習を目指した。
- ・そして来館学習（当日課題）では、展示室内の他資料、キャプションや他の展示室での発見、ハンズオン展示などを活用した博物館でしかできない学びを重視した。

またその際、資料や展示の利用方法としての3つのモード²（①眺めること②入り込むこと③想像すること）を意識し、「入り込みつつ眺め、眺めつつ入り込む」という揺れが起きたり、既知の事柄と関連させたり自分の経験を思い起こすなどによって自分なりの解釈をその都度しながらその背景を考えたり想像することができるように心掛けた。

3. 指導計画：（博物館内授業2時間分扱い）

*当日は、コロナ禍での実施であったため、研修室利用や館内でのグループワーク・解説に制約があったことを付記しておく。また、事前課題と当日課題は末尾に掲載する。

過程	時間	○学習活動 ●学習内容	□指導上の留意点 ■評価の観点
事前指導		●【資料1】「南瞻部洲図」の読み解きを行い、 ○事前課題（ワークシート）に取り組む。（後掲事前課題参照）	□参加生徒に対して、絵地図の読みとり方や来館型学習との位置づけの説明を行ったが、資料内容についての情報は一切伝えずに取り組ませた。 □ワークシートは紙媒体で配布し、古地図画像は Google classroom で配信した。
当日指導	5分	●博物館内における注意 コロナ禍でのマナー	□コロナ禍のため、屋外にて解説した。

¹ 『絵図学入門』（東京大学出版会、2011年、35頁）

² 並木美砂子「博物館の利用者主体の教育論構築にむけて」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第140集、2008年）より

導入① (屋外)	15分	○参加者全員の事前課題の解答を確認する。	<input type="checkbox"/> 各生徒の答えやコメントを紹介しながら、他者の考察への興味関心を持たせる。 <input type="checkbox"/> 他者の考察を知り、自分にはない視点について考えさせる。 <input checked="" type="checkbox"/> 資料について、自分なりの興味関心をもって細部まで読み取ろうとしている。 <input checked="" type="checkbox"/> 事前課題のプリントにまとめた内容を自身の言葉で的確に表現できている。
		*事前課題解説プリントを配布する ○事前課題解説プリントを読み、教員の解説を聞き、自分の答えをもう一度確認する。 ●【資料1】「南瞻部洲図」の解説を通して仏教的三国世界観を知る。 *事前課題を回収する。	<input type="checkbox"/> 「南瞻部洲図」や仏教的三国世界観の詳細な内容は難解なため、仏教的世界観であるという事、南瞻部洲のほとんどが仏教誕生の地インドであることなどの概略にとどめ、展示室での学習へとつなげる。
導入② (屋外)	10分	*当日課題の配布 ○説明を聞き、事前課題と当日課題のつながりを確認する。	<input type="checkbox"/> 第3展示室内には仏教系世界図以外の系統の世界図があることを伝える。 <input type="checkbox"/> 展示室内で持参したデバイスから Google Classroom 経由で古地図資料を閲覧できるように事前に準備をさせる。
展開 (第3展示室)	50分	○第3展示室内「絵図・地図にみる近世」の絵地図資料やハンズ・オンを活用し、当日課題に取り組む。	<input type="checkbox"/> 各参加者への声掛け、適宜アドバイスを行う。 <input type="checkbox"/> 展示と合わせて、Google Classroom で絵地図の画像を各自のデバイスで自由に拡大してみるように促す。 <input checked="" type="checkbox"/> 各資料の内容をよく観察しながら、まとめられている。
まとめ (屋外)	20分	○調べた内容について発表 *当日課題を回収	<input checked="" type="checkbox"/> まとめた内容を自分の言葉で発表できている。
事後指導		○後日生徒の提出したワークシートの内容をまとめ、教員がコメントを加えたものを参加者全員に配布し、知識の統合を図る。	<input type="checkbox"/> 博物館展示を通してうまれた、興味関心を大切にし、生徒たちの疑問点に対して教員が完璧に答えることよりも、方向性を示しつつ、生徒の関心を広げるように意識したい。

4. 実践の概要

本実践は、参加者合計22名(中1:6名、中2:13名、高1:3名)に対して、本校(中高一貫校)の選択制授業「土曜講座 そうだ!博物館へ行こう!!」の中で実施した。土曜講座とは、教員や保護者が企画・立案し、中1~高2の希望者を対象に行われる一回完結の授業である。中学1年生から高校2年生までの幅広い参加者は歴史学習において学習段階に差があることや、事前事後の授業を行いにくいなどデメリットもあるが、希望者が参加するため、興味関心のある生徒の参加が多く、比較的少人数で実施することができるなどのメリットがあり、各々が博物館展示や資料と向き合い、探究することを主眼に置いている。

(1) 事前学習について

事前学習では、事前課題ワークシート（後掲）を配布し、取り組ませた。来館学習で「南瞻部洲萬國掌葉之図」やマテオ＝リッチ系世界図、蘭学系世界図との比較を行うため、法隆寺に所蔵される現存最古の仏教系世界図（1364年）の系統に属する写本であり、その原型を伝えている「南瞻部洲図」の読み解き、日本人が伝統的に有していた世界観の理解を目指した。また、事前課題では読み解きの際のヒント、ガイドとして三好唯義編『世界古地図コレクション』（河出書房新社、1999年）から仏教系世界図の模式図を引用し添付した。

「南瞻部洲図」（資料①）について以下の問いを設定した。

- Q1. 資料①の絵地図はいつ頃描かれたのでしょうか？（形に注目して予想してみましょう）
- Q2. この絵地図の中心に描かれている地域は、現在何という国にあたりますか？
- Q3. Q2.の答えの地域を中心とした世界地図が多くつくられました。なぜだと思いますか？
- Q4. この絵地図をみて「不思議だな」「なんだろうな」など気になったところをできるだけたくさん挙げよう。
- Q5では、三国世界観とつなげるため、川村博忠『近世日本の世界像』（ペリカン社、2003年）を参考に、16世紀～17世紀のポルトガル宣教師による記述（資料②）から「三国」とはどの国を指すのだろうかという推測をたてさせた。

Q1では、紀元前5世紀から江戸時代まで幅広い解答が見られた。解答の多くを占めていたのが古代の時期であった。そもそも、この資料から読み取れる情報で作品の制作年代を確定させることは非常に難しく、正確な年代を答えさせる意図の設定ではなく、生徒たちが地図の形状などからどのように判断をするのかを把握するための意図で設定した。大半の生徒が深く考えずに答えていたが、形状や資料中に記載されている文字、模式図などから根拠を挙げて推測し、年代比定しようとしているものもあった。

【Q1：生徒の記入内容】

高1 O君：古代？地球が球状の物体だと信じられていなかった頃

高1 K君：地球に端があると思われていた時代

中2 N君：織田信長が地球儀を手にしていたという話から15世紀より、前と考えた。また、「シナ」という名は秦が語源なので、紀元前206年以降だと思う。また図中の赤い線はシルクロードだと考えたので、紀元前2世紀以降でもあると思う。「無熱池」やペナレスという仏教に関わる地名があることから、インドでヒンドゥー教が広がり始める4～5世紀頃か、それ以前である。そして、マガダ国は紀元後グプタ朝が約319-500であったので、それいなかその周辺だと思う。

Q2・3では「南瞻部洲図」の中心にあり、大部分を占める地域が現在のインドであることを読み取らせ、インドを中心とした地図が多いところから、インドと関連のある既知情報を結び付けて、その理由を推測してほしいという意図で設定した。Q2では22名中15名がインドと答え、他にもネパール、パキスタン、バングラデシュ、ブータンなどがあつた。また、Q3では、仏教との結びつきに言及していた生徒が6名、地図中の赤い線をシルクロードと考え、シルクロードによって広まったと推測した生徒が4名など情報を結びつけようとする解答が見られ、どちらもすべて中1、中2の生徒の解答であつた。

【Q3：生徒の記入内容】

中2 T君：当時は仏教の信仰が厚かつたから。無熱池は仏教での呼び名

中2 K君：インド（≡天竺）は仏教の祖ガウタマ＝シッダータの悟りを開いた木があり、以降仏教の中心地及び聖地だから。

中2 N君：西アジアのペルシャから中国までシルクロードが通っており、その途中であるインドを中心とした地方の街道？（赤道）を周囲の地方であわせてルートを分かりやすくする目的でつくられたのだと思う。また、当時からインド民族の人口が多く、そのためインドを世界の中心とした地図が作られたと考えられる。

Q4では、「南瞻部洲図」から読みとつた情報の中で、疑問に思つた点を挙げさせた。これまでの設問と異なり、制限をかけずに、それぞれ興味関心で深められるように意図して設定した。

南瞻部洲の形状に関する疑問や中心にある無熱池のうずまきの形状、地図中に記入されている赤い線について、世界として捉えられている範囲についての疑問が多かつた。

【Q4：生徒の記入内容】

中2 T君：同じインドが4分割されていること。／三カ国しか書かれていないこと。／ところどころにある国はなにか。／無熱池にあるうずまき模様／なぜ線が赤いのか／なぜ輪郭の外にも地を書くという構図にしたのか。／実際の地名と仏教語を混ぜて書いていること。／川が地図の外にはみでている。

中2 N君：中央上部にあるうず巻き型の「無熱池」が気になる。／各地方の川や赤い線の道？が地図中で重要視されていると思う。／また、地図各地（主に赤線付近）に鳥居や寺院のようなものが沢山ある。日本は九州と四国のみ記されており、大和までがないことから九州などの近い地域とのみ関わりがあったのか。／日本よりも地図中ではセイロン島やその近辺の島の方が大きいことから、関わりの多い地域ほど情報が書き込まれている。／マラヤ山（ヒマラヤ）？やポタラカ山が半島のようにになっているが、その先の土地は知らなかったのだろうか。それとも宗教的意味があるのだろうか。

中2 K君：方角が示されていない。／地名の位置が今と大きく違う。／近くの間所以外（アメリカ、ヨーロッパなど）が示されていない。

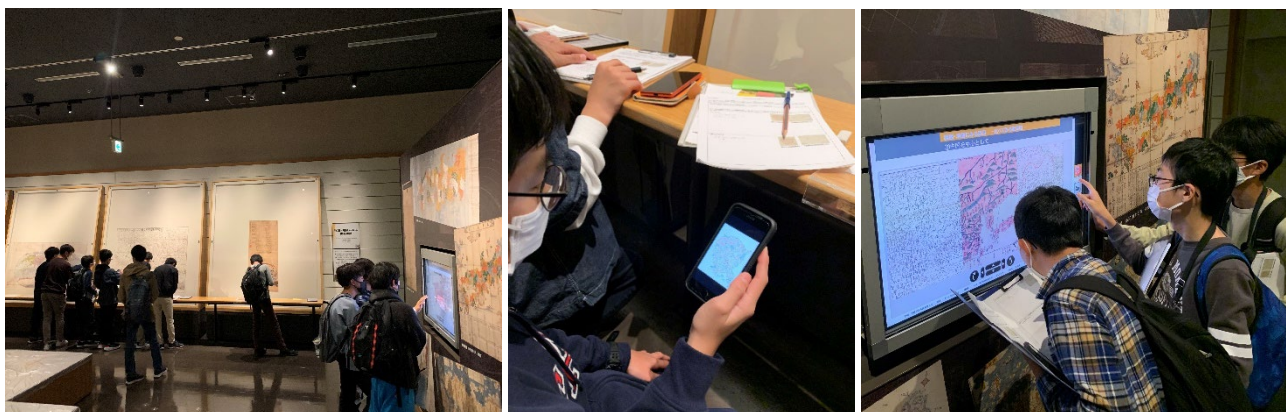
Q5では、天竺（インド）・中国・日本・ネパール・ペルシャ・朝鮮半島などの名前が挙げられた。

当日は、事前課題の確認からスタートした。各参加者に簡潔に発表させ、事前課題の解説プリント（後掲）を配布し、以下の内容を伝えた。

- ・資料①で示した歴博所蔵の「南瞻部洲図」は法隆寺に所蔵される現存最古の仏教系世界図（1364年）を江戸時代中期に書き写したものであるという事。
- ・インドを中心とした仏教の思想に基づいた世界地図であるという事
- ・赤い線は中国の唐の時代の僧玄奘（のちに西遊記のモデルとなった僧、三蔵法師）が仏教上の疑問点を解決するために仏教の本場の学者に教えを請い、仏典を求めてインドを旅した道を示している事。
- ・これから見学行く歴博展示室内にある、近世の世界図には仏教系以外の系統の世界図が存在するという事。

(2) 当日課題について

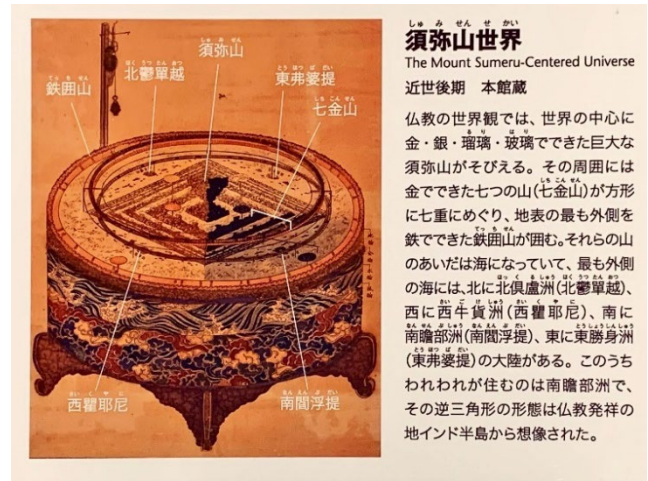
事前課題を踏まえて、当日課題ワークシート（後掲）に取り組んだ。まず事前課題で読み込んだ「南瞻部洲図」と第3展示室内の「南瞻部洲萬國掌菓之図」との比較を行い、仏教系世界図とマテオ＝リッチ系世界図、蘭学系世界図との比較を行って気が付いたことを挙げさせた。そのうえで、最も面白い、興味深いと思った展示（絵地図資料や第3展示室全体を含めて）を紹介する形で、生徒たち自身の関心に沿って発見した事を表現させた。次頁で、ワークシートの問いと生徒の記入内容について紹介する。



第3展示室内での学習の様子

Q1. 事前課題の【資料1】は「南瞻部洲図」という絵地図です。「南瞻部洲」とはどのようなところですか？第3展示室中の展示パネルを参考にして答えましょう！

右の展示パネルから、「南瞻部洲」の内容を正確に読み取ることができたかを確認した。中1、中2でも正確に読み取れている解答がみられた。一方でインドとのみ答えているものも多かった。



須弥山世界
The Mount Sumeru-Centered Universe
近世後期 本館蔵
仏教の世界観では、世界の中心に金・銀・瑠璃・玻璃でできた巨大な須弥山がそびえる。その周囲には金でできた七つの山(七金山)が方形に七重にめぐり、地表の最も外側を鉄でできた鉄圍山が囲む。それらの山のあいだは海になっていて、最も外側の海には、北に北俱盧洲(北鬱單越)、西に西牛貨洲(西瞿耶尼)、南に南瞻部洲(南閻浮提)、東に東勝身洲(東弗娑提)の大陸がある。このうちわれわれが住むのは南瞻部洲で、その逆三角形の形態は仏教発祥の地インド半島から想像された。

- 中1 O君：仏教の世界観での人間世界→特にインド周辺を指す。
中2 I君：われわれが住んでいる仏教の世界。

Q2 では事前課題の「南瞻部洲図」と第3展示室中の「南瞻部洲萬國掌菓之図」を比較し、共通点と相違点をそれぞれ挙げさせ、Q3 では、なぜ相違点が生まれたのか(改変されたのか)を予想させた。

【生徒の記入内容】

- 中1 K君：**共通点**無熱惱池がある。／仏教思想がどちらもある。／どちらも中心部は拡大され、はじにいくと本当の大きさと違い、とても小さい。／折り目がある。
相違点海岸線がだ円ではなくしっかりごつごつしている。／三蔵法師の道がない。／年代が違う。／日本の地名がくわしい。／入っている国の数が増えた(全体的になかったところが追加された、トルコ、モンゴル、ロシアの方?)
なぜ異なる部分が生まれた?違う異なる人が歩くので歩幅や大きさの感覚が違う。／ヨーロッパなどから新しい地図の書き方をしたり、新しい国、地域を知ったから。仏教の価値観が違う。
- 中2 N君：**共通点**無熱池が中心にある。しかし色が変わっており、巨大な生物がいる。
相違点寺院や鳥居が赤線の近くに沢山あったが、記入されなくなっている。／ヨーロッパ地方は「ペルシア」だけであったが、より具体的な地名で、また形も現在のものと近い。／ブラジルなどの南アメリカが非常に小さく書かれている。／日本地図は比較的精密で、情報量も多い(藩名など)、しかし蝦夷地は非常に小さく適当／漢文にレ点があることから日本人向け。／文字は印刷?
なぜ異なる部分が生まれた?仏教的世界観のみならず、ヨーロッパから得た新しい地理的知識にも影響を受けているから。測量技術が発達し、それを古典的な仏教世界に入れたため。／仏教世界を理解するのみならず、場所を理解するためにも用いられた。
- 中2 K君：**共通点**うずまきのようなものが描きこまれている。インドが大きく描かれている。
相違点資料1(注「南瞻部洲図」)と比べ「南瞻部洲萬國掌菓之図」では、中国と日本が地理的に正確に描かれている。／新たにヨーロッパの国が追加され、左右対称性が崩れている。
なぜ異なる部分が生まれた?大航海時代や鎖国政策下のオランダなどからもたらされる情報や朝鮮通信使の情報を介して、中国や朝鮮の地理の情報が入ってきたのにも関わらず、資料1では、インドを中心に非常に大きく描かれており、資料1は仏教の思想、つまり精神世界としての性格が全面に出ていて、「南瞻部洲萬國掌菓之図」では、仏教の精神世界の性格はもちろん読み取れるが、より地理的に正しくなっていて何か正確に描く必要や理由が生まれたと考えられる。
- 高1 S君：**なぜ異なる部分が生まれた?**より時代が進むごとに世界の形というものが判明し、それをとりいれざるをえなかった?

各々の見方で地図を読み込めており、仏教系世界図の変化について言及できている生徒が多く、ヨーロッパから地理学的知識が流入したことを深めるため、第3展示室の導入展示「国際社会のなかの近世日本」のキャプションを参考している生徒(前頁の中2 K君など)もあり、展示室全体の利用を促す声掛けをすることも理解を深めるうえで有効だと感じた。

Q4 ではハンズ・オン展示のタッチパネル「比べてみる世界図」を使用して、近世の各系統の世界図を比較して疑問や興味深いと思ったことを挙げさせた。



【生徒の記入内容】

- 中1 S君：うず巻いているところがちがう書き方になっている。
- 中2 H君：無熱惱池が新訂万国全図のインドのデリ、ガンゲス付近に当たることがわかった。南瞻部洲萬國掌菓之図の無熱惱池が改正地球万国全図の川らしいものが交わる場所だった。
- 中2 M君：南瞻部洲萬國掌菓之図にはアフリカがない。改正地球万国全図はアフリカの形がしっかりとできています。新訂万国全図には南極がはっきりとした陸地として描かれていない。
- 中2 T君：南瞻部洲萬國掌菓之図→うずまきの中心にいる動物のようなものはなにか。／隅に書かれている漢文に訓点がある理由。／改正地球万国全図→大西洋以外は海の表記がほとんど違う。／ユーラシア大陸以外は今より比率（大きさ）が高い。／気候帯が記載されている。／緯度・経度が書かれている。／新訂万国全図→世界地図なのに細かい地名がびっしり描かれている。／西半球と東半球に分けて地球を2つに分けて描いている。
- 高1 S君：新訂万国全図の日本がリアル。伊能図の前でもある程度の地理は知られていた？／1800年代の日本でも緯度と経度の概念はあった？／オーストラリアのことを新オランダと表現している。1710年の地図なのに、まだ任那や百済がある。

タッチパネル「比べてみる世界図」では3枚の絵地図中の1枚の位置を移動させると、それに連動して他2枚の絵地図も同じ位置を示すため、地域を絞って簡単に比較することができ、生徒達も非常に熱心に利用していた。この技術を教室でも利用できるようになると、実践の幅が広がる可能性があると感じた。

Q5では自分が面白いと思った地図や展示内容を紹介させた。その際、文章や図を利用し、第3展示室に来たことのない人に向けた内容にするようにした。事前学習やその比較で検討した仏教系世界図以外の展示室内の資料を紹介しているものも多く、来館での関心の広がりや価値があるということに改めて感じた。以下、生徒たちの記入内容を紹介します。

【生徒の記入内容】

中1 S君：須弥山地図は図Iのような形である。この世界地図は仏教的宇宙の模型である須弥山儀を描いて解説したものである。西洋の天文学に対抗するため円通が作製。もし、この絵地図だけでは何のものか分からないが、説明を見ると江戸時代で考えられていた世界感が分かってくる。他の地図とくらべても興味を持ちやすいので、ぜひ見てほしい。



中1 S君：「改正地球万国全図」⇒この地図の南を占めている大陸はヨーロッパで信じられていた架空の大陸です。この地図は坤輿万国全図から引き継いだ情報と新しい当時の地理的知識が付加されている。しかし、この地図が世に出たときには、新しい世界認識があった。この地図は色分けによりヨーロッパ州とアジア州を分けているのが面白い。



中2 T君：南瞻部洲萬國掌菓之図→この図は1710年に描かれ、南瞻部洲図を参考に作られました。仏教の考え方を基に作られ、インドが中心になっています。特徴は仏教の考え方が基なので、現代の地名にない空想の地が描かれていることです。また、インドを中心とした地図なので、日本を中心とした地図とは構図が違います。また、限られた国しか出てきません。とても細かい所まで描かれているので、ぜひ見に来てください。

(3) まとめ、事後指導について

第3展示室での活動終了後、屋外にて再集合し、それぞれ当日課題の内容を簡潔に発表した。それぞれ注目した点を挙げた後で、教員の方から仏教系世界図の変遷、設問の意図を簡潔に伝えて、ワークシートを回収した。事後、集まったものの中から注目した内容を集約し、コメントをつけて生徒に配布した。

コロナ禍であったため、グループ活動や室内での発表はできなかったが、グループ活動を行い、対話的に深めていくことができると視点の共有や多様な見方ができたのではないかと感じた。今回中学1年、中学2年の生徒が大半を占めたが、みな熱心に積極的に取り組んだ。この実践を通して、博物館や展示作品に対する見方に変化があったかや、感想などを次ページで紹介する。

【生徒の記入内容】感想・博物館や展示作品に対する見方に変化があったか
中1 K君：比べてみるのはすごく大事で参考になるということ。ぼくは城旅を年に1回するので、その時にいかしてみたいです。いろいろな展示物を見て宗教観なども変わった。
中2 H君：資料同士を比べると時代や当時の思想の違いが大きくあらわれていて、面白かった。これからも資料を比べて違う点を探してみたいと思った。
中2 K君：不確定な情報がある中で作られた地図や、同じ種類の地図の進化について知ることができた。

5. 成果と課題

(1) 成果

- ・生徒の感想にも多く残されていたこととして、博物館資料の細部にまで注目し、自らが読み解き、関連する出来事や既知の情報と結びつけることや史資料を比較するという博物館展示の一步踏み込んだ鑑賞の仕方（見方）を学ぶことが出来た。
- ・歴博所蔵資料の高精細画像データの活用させていただけたことで、前提となる情報を事前学習において個々のデバイスを利用し、深く探究することができた。また来館時にも各絵地図資料を比較する際に使用できるため、非常に効果的であった。
- ・歴博所蔵の絵地図を利用し、教科書では扱われない世界観（仏教的三国世界観）やその変容について考察をすることができた。

(2) 課題

- ・今回の実践では、コロナ禍ということもあり、学習活動のほとんどが個人作業となってしまった。史資料について対話的に深めていくことも非常に重要である。コロナ禍以降の行動様式において双方向的に意見を交わす方法について検討していきたい。今後の実践に向けた課題である。
- ・歴博提供画像データの扱いについて。今回の実践で使用させていただいた画像データは高精細であったため生徒自身が資料を読み取る際には、非常に有効なものとなった。一方で、歴博所蔵資料データベースからではなく、提供いただいた資料であるため、利用については細心の注意を払い、生徒にもデータの取り扱いについては注意を促した。今回事前学習で生徒との共有で使用した Google Classroom というツールでは、生徒がオンライン上で観るだけでなく、データをダウンロードすることが可能なためである。コロナ禍以降の社会の変容の中、非来館型の博学連携の充実を図っていく上で、データ資料の取り扱いについてもルール作りが求められる。

最後に、本実践を行うにあたり、国立歴史民俗博物館広報サービス室の学校対応の方々には、様々なアドバイスや資料データ提供を頂きました。御礼申し上げます。

6. 参考文献

- ・室賀信夫・海野一隆「日本に行われた仏教系世界図について」、同「江戸時代後期における仏教系世界図」（地理学史学会編『地理学史研究』臨川書店、1979年、初出1957年、1962年）
- ・織田武雄『地図の歴史—世界篇』（講談社、1974年）
- ・応地利明『絵地図の世界像』（岩波書店、1996年）
- ・三好唯義編『図説 世界古地図コレクション』（河出書房新社、2014年、初版1999年）
- ・川村博忠『近世日本の世界像』（ペリカン社、2003年）
- ・『絵図学入門』（東京大学出版会、2011年）
- ・上杉和夫『地図から読む江戸時代』（筑摩書房、2015年）
- ・国立歴史民俗博物館編『わくわく！探検 れきはく日本の歴史3近世』（吉川弘文館、2017年）
- ・海田俊一『江戸時代に刊行された世界地図』（三恵社、2019年）

※絵地図資料を使用した歴博博学連携研究員によるこれまでの実践には以下のものがある。

片山健介「前近代地図の想像力に挑戦する」（2011年）

荒井雅子「中世から近世の人びとはどのように世界認識をしていたか—南瞻部洲万国掌菓之図の教材化—」（2013年）

絵地図の世界を探ろう！

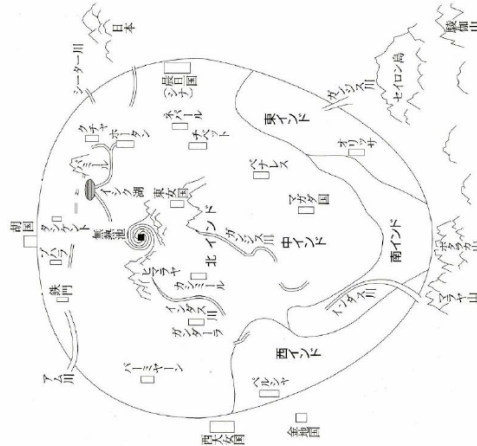
【事前課題】(個人)

中学・高校 年 組 番 氏名

Google Classroom で共有した資料は国立歴史民俗博物館所蔵の絵地図です。全体・細かい部分まで鑑賞してみ
て、以下の問いに答えてみよう！（あまり難しく考えなくて良いので、思ったままに記してください！予想でも構いません！）

【資料①】

【資料①】の様式図



Q1. 資料①の絵地図はいつ頃描かれたのでしょうか？（形に注目して予想してみてください！）

Q2. この絵地図の中心に描かれている地域は、現在何という国にあたりますか？

Q3. Q2.の答えの地域を中心とした世界地図が多くつくられました。なぜだと思いますか？

Q4. この絵地図をみて「不思議だな」「なんだらうな」「なんか変わったところをできるだけたくさん挙げよう。
(順番書きOK)



【資料②】

ロドリゲス (Joao Rodriguez・イエズス会のポルトガル人宣教師、1577年に来日し、1610年に日本を出国した人物。) が書いた著作の一部

「日本人も中国人も、昔は三つの国についてしか知識を持っていなかった。そしてそのなかに地球の全陸地が含まれ、残りのすべては四方からこの陸地を取り巻いている海であると考えていた。」

出典：『日本教会史』下（岩波書店、1970年、185頁）

図版

Q5. 下線語の三つの国とは、どの国を指すのだろうか？（資料①も参考にしよう！）

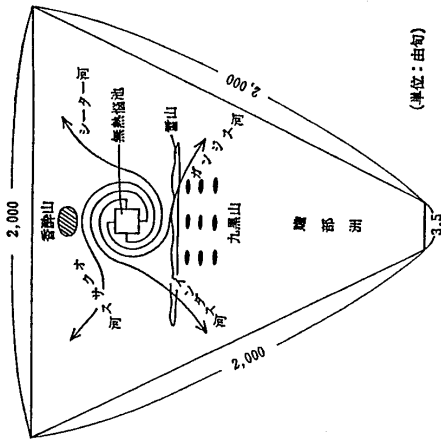


図1-1 南瞻部洲の概念図(定方殿『須弥山と極楽』より)

南瞻部世界 仏説によれば人間の住む世界は、須弥山のまわりにある四大洲のうち南の瞻部洲(閻浮提)である(図1-1)。居住世界である瞻部洲の形態は北が広くて南が狭い台形であつて、大陸の中央に雪山(ヒマラヤ山脈か)があり、その山中の無熱惱池(マナサローラ湖か)からガンジス河、インダス河、オクサス河(アム・ダリアか)、シーター河(タリム川か)の四大河川が流れ出ている。雪山の南には天竺を五つに分けて、中天竺を中央にして東・西・南・北の各天竺を配し、あわせて五天竺と称している。大陸の東北端の片隅に震旦(中国)があり、西北端に片寄つては波斯(ペルシア)がある。

このような逆台形の形をした瞻部洲の姿はインド半島を反映しており、インダス河やガンジス河が流れるなど、インド人の具体的な地理知識から構想されたのであろう。このような須弥山説に基づいて、わが国にもインドを中心とする南瞻部世界を描いた仏教系世界図がもたらされていた。現在わが国に残るこの種の世界図でもっとも古いものは貞治三年(一二三六)に重懐(じゅうゑ)によつて書写されたという法隆寺蔵の『五天竺図』である(図1-2)。それをみると、瞻部洲大陸のほとんどを天竺(インド)が占めていて、東北端のほんの一角に震旦国(中国)があつて、その東方海上に日本が浮かんでいる。卵形大陸の上部中央の中心的な位置に四大河川の源流である無熱惱池がある。東西南北に分かれた五天竺には多くの堂塔仏跡が描かれている。そして図中には、仏典を求めて七世紀のころインドへの巡礼をおこなつた唐時代の玄奘法師(げんざう)の道程が朱線で引かれている。

また南北朝時代に神国思想の古典ともいふべき『神皇正統記』(一二三九)を著した北畠親房は、その著のなかで須弥山説をもつて世界の地理像を説明している。瞻部洲(世界大陸)の中心は天竺であつて、中国については「震旦広しといへども五天竺に双ぶれば、一辺の小国なり」といい、日本については「天竺よりも震旦よりも東北の大海の中(一)にあり」と記している。

転載：三村博士『近世日本の世界像』(ペリカン社、2003年、12～13頁)

絵地図の世界を探ろう！

【当日課題】

中学・高校 年 組 番 氏名

第3展示室「絵図・地図にみる近世」に展示されている絵地図や展示室のタッチパネルを使用し取り組んでみましょう。また、クラスルームで共有した絵地図の画像を手元のデバイスで拡大して細部にまで注目してみると面白い発見があると思います。

Q1. 事前課題の【資料1】「南緯部洲図」という絵地図です。「南緯部洲」とはどのようなところですか？第3展示室中の展示パネルを参考にしてください。

Q2. 事前課題の【資料1】「南緯部洲図」と第3展示室中の「南緯部洲萬國學業之図」を比較したときに、似た部分と異なる部分をそれぞれできるだけ多く挙げてみましょう！

【似た部分】



資料1「南緯部洲図」



資料1「南緯部洲萬國學業之図」

【異なる部分】



資料1「南緯部洲圖」



資料1「南緯部洲萬國學業之図」

Q3. なぜ異なる部分が生まれたのかを予想してみてください。



Q4. タッチパネル「比べてみる世界図」を使用して、「なんだろうな」「興味深いな」など発見したところをできるだけ多く挙げてみましょう！

Q5. 第3展示室内にある地図(クラスルームで共有した絵地図、タッチパネル内の絵地図を含む)を1つ選んで、面白い、興味深いと思った点を示して、第3展示室に来たことがない人に向けて、プレゼンしてみよう!

【資料名】

の

が興味深い!

本日の土曜講座に参加して、博物館や展示作品一般に対して、見方が変わった点がありますか?
いずれかに○→() ない ・ ある)

↓↓ あるに○をつけた人は具体的にどんな点か書いてください。